

## 一つの区切り

杉山 毅

昭和42年の秋、佐藤弓葛先生のお招きを受けて広島大学文学部に着任した私は、その後20年もの歳月をそこで過ごすことになろうとは、正直なところ思ってもみませんでした。というのも、着任した折りのことですが、4・5年ぐらいいてくれればいいよ、あとはどこにでもご自由に、と寛大なお気持ちから佐藤先生が仰っていただいたのにたいして、もちろん最初からそのつもりでいたわけではないのですが、機会があればそうさせていただくかもしれません、とお答えしていたからでした。折角お招きいただいた先生に非礼とも思えるこのような応答をあえてした理由を、今になって考えてみますと、小学校を4校、旧制中学を2校、それから別の新制高校で大学前の最後の2年間を過ごすといった具合に生来各地を転々としてきた私には、自分の知らない間に一種の放浪癖ともいうべきものが身についていたからなのかもしれません。

(転勤こそしませんでした、広島で4度も、つまり吉島から可部、船越、美鈴が丘へと住まう所をかえたのも、おそらくそのせいでしょうか。)ですから、かりに人間の生き方を定着型と放浪型に大別しようとすれば、私は間違いなく後者に属することになると思います。

ところが、私が着任して6年半後の昭和49年、話は逆に佐藤先生のほうが新設まもない筑波大学へ転出していかれました。福島県の二本松をご郷里とされる先生は、できるだけそれに近い所をという理由で広島をあとにされたのですが、その結果、フランス文学教室の運営という身にあまる後事を託された形となった私は、多少不謹慎な表現をお許し願えるなら、しまった、先を越されてしまった、と内心いささか悔しい思いをしたものでした。しかし、実際はそのようなことを口にしていない暇はなく、教室主任の役を仰せつかってからは、授業面では亡くなられた林 道恵先生をはじめとする総合科学部の諸先生や教室の卒業生でフランス語教官としてすでに活躍しておられる方々のご援助を受けつつ、2年後の昭和51年4月、当時広島女学院におられた原野 昇氏を助教授として迎え、どうやら教室の体制を整えることができました。以後、多少の紆余曲折はありましたが、(少なくとも私の意識においては)またたく間に10余年の歳月が過ぎてしまいました。その間、いちいちのお名前は省略させていただくにしても、関東、近畿、九州などから集中講義にご足労いただいた諸先生を含めて、多くの方々のご好意や援助を受けてきましたことに、私は深く感謝しているしだいです。しかし、この際、とくに謝意を表しななければならないとすれば、それはその間の教室の助手を務めてくれた玉田健二、南 直樹、佐藤正年、柴田道子、武田治人、吉田正明、奥村真理子の諸兄姉にはないかと思っています。この人たちからは、教室

の雑事の処理や学生の公私にわたる指導という面で、計り知れない尽力を受けました。

在任中のあれこれについて多少の感慨もなくはありません。大学紛争のこと、またその時の教室の学生諸君のこと、歴代のフランス人教師にまつわるエピソード、学内フランス文学研究会の創設や本誌創刊にいたる経緯、広島大学におけるいわゆる大学院問題や講座制をめぐる論議、および文学部各教室のそれらにたいする対応、など思いつくままに列挙しただけでも書いておきたいと思われることは少なくありません。しかし、それはまたいずれ別の場所に書かせていただくことにして、ここでは昨年秋、広島在住満20年を迎えたことを一つの区切りと思い、退職を決意した事情について、蛇足ながら一言しておきたいと思います。

かねてから、私は自分の後継者（と目される方）がある年齢（具体的には私が教室主任をお引き受けした年齢）を超えたなら、機会さえあればできるだけ早い時期に交代したいものだと考えていました。その理由はきわめて単純で、まずそれが早く教授になったものの当然の義務ではないかということ、さらにいえば学生諸君の将来を左右しかねない教室主任という責任の重い仕事は、一人の人間が長期間にわたって務めるべきものではなく、10年くらいを限度に交代するのがよいと考えていたからにほかなりません。とくに大学院への進学者を選択しなければならない時期には、その適否の判断において誤りがないかという点で悩むことがしばしばでした。私が主任教授10年交代論をいうのは、その労を惜しむというのではなく、若い人の将来にかかわる問題では、できるかぎり風通しをよくしておくほうがよいという意味でそれをいうのですが、人格高潔な立派な学者が長きにわたって優れた指導力を発揮された好ましい例もないわけではありませんから、こうした考えを一般論として主張しようとは思いません。しかし、少なくとも自らの持論としてかくありたいと願っていた私としては、ここ数年来、文学部では比較的早く教授のポストにつき、すでに14年も主任を務めさせていただいた以上、この持論の実行こそが早急に解決すべき自らの課題と考える時期にきていました。政治の世界を見れば一目瞭然ですが、長期政権に汚職や腐敗はつきものです。もちろん、わが小教室には汚職をしようにもそれだけの財源はないので、幸か不幸かその心配は皆無ですが、凡庸な一人の人間の活力と持久力にはおのずから限度があり、多少の時間の差はあっても、いずれは惰性化し停滞してしまうものでしょう。その上、困ったことには、その人間の活力がすでに枯渇しているのに、当の本人だけがそれに気付かない場合もありうるようです。「平凡な無能な人間と妄想家とが一緒になるのが、いちばん恐ろしい」（『箴言と省察』ゲーテ）。正直なところ、そういう事態を私は恐れていました。2講座以上の教室ならば、複数の教授がいて主任を交代して務めることができますし、相互批判の作用も働くでしょうから、別の考え方もありうるかもしれません。（ときにその作用が働きすぎて、いつも内紛が絶えない教室があるという話も耳にしますが、それは言及するにも値しない次元の低い問題といわねばなりませんまい。）ところが、1講座の教室では、よほど自戒していても

主任が独断専行に陥る危険性はあり、その意味では教授の責任は重かつ大といわねばなりません。その重い責任を定められた年齢まで担い続けることこそ、本当の責任の取り方だとする考えがあり、それが大方の常識の示すところだということも弁えていますし、退職することだけがその責任を果たす唯一の道だなどとは思いません。しかし、もし少しでも早く新旧の交代が実現できれば、そこにはそれだけ早く新しい若い才能が教室の運営を司どる可能性が生まれてくるわけで、それはそれで決して悪いことではないと考えていました。いや、むしろそれは凡庸な人間でもなしうる、教室にたいするきわめて有意義な大きな貢献ではないか、とすら私には思えたというわけです。

ところで国立大学の教授というポストは、よほど破廉恥な犯罪でも犯さないかぎり完全な身分保証がなされていますから、自分から辞めるといわないかぎり、誰からも辞めよと強制されることはありません。ましてや、小講座制の教授というのは、いわば一城の主のようなもので、極端なことをいえば、その城のなかでは何をすることも、逆にいえば（当然しなければならぬことであっても）何もしないことも自由なのです。ですから、率直にいうと退職の決意を実行する段階では躊躇する気持ちもありませんでした。しかし、息子の就職、転職先からの勧誘など、幸いなことにその決断を容易にしてくれた私的な理由もありましたので、教室主任14年を含む在職20年という歳月を、いちおう自分の能力を活用させるために与えられた十分な時間、放浪型の私にしては長すぎる程の一つの区切りと考えることにし、ともかくその決意を実行することにしました。加えて、数年前から、いわゆる行政改革の一端として国立大学の教官にも勧奨退職制度なるものが適用されることになり、国立大学勤務25年以上、定年前10年以内であれば、後進に道を譲るということで定年退職扱いされることになりました。この制度が、私の決断を早める作用を及ぼしたことも否めない事実でありましょう。

私の後継者となられる方が教室の体制を固められるまでには、多少の時間がかかるかもしれません。その間、院生をはじめとする学生諸君に迷惑がかかることもあるでしょうが、それは私がかかりに定年までいた場合にも起こることで、ただその時期が少し早かったというだけのことだと思います。教室の学生諸君には、とくにその点のご理解をえたいと思っていますが、ひとたび教室の体制が整えば、その時点から新しい充実した未来への確実な歩みが始まることになります。意欲的な勉学を通して、学生諸君もその歩みに積極的に参加してほしい。そのことに、私は大きな期待を寄せ、夢と希望を膨らませています。「希望があれば、別れは冥のごとし」という言葉は、広島を離れてはじめての夏を迎えた私の心境を、今もっとも適切に表現してくれているようです。

(1e 30 août 1988)